

文書登場が天文一八年

醜の地名が歴史上初めて古文書に登場するのが、奈良・興福寺の、天文一八（一五四九）年に作った荘園（領地）一覧表です。ここに、同寺領地の高殿庄（現高殿町などの一帯）に付属する土地として「醜方」が見えます。この高殿庄が嘉応二（一一七〇）年の興福寺関係文書に早くも登場しています。そのころすでに高殿庄の一部として醜の地名が生まれていたとみられています。

牛乳を精製して作った「最も美味（おい）しいもの」が醜です。その深い味わいから転じて仏教最高の教えを指すようになり、人がよく言う「醜味」も生まれました。豊臣秀吉の「醜の花見」で有名になった、京都市伏見区の真言宗総本山・醜寺が貞観一六（八七四）年に創建されています。中世最後の政治安定期とされている醜天皇の治世（八九七―九三〇）も、まさにこの時代です。これら一連の事々が地名の生まれた歴史的な背景だったといえるようです。

かつて、木原・醜町にまたがってあった夫婦池（めおといけ）で、旧石器・縄文時代の有舌尖頭器（ゆうぜつせんとうき）石のヤリ先が見つかっています。早くから人の住んでいた証拠です。